

観光バスの行かない……

岡部伊都子

新潮文庫



かんこう い
観光バスの行かない……

埋もれた古寺

定価はカバーに表
示してあります。

新潮文庫 青 49 A

昭和五十年二月二十日 印刷
昭和五十年二月二十八日 発行

著 者 岡部 伊都子

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四

振替東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社

© Itsuko Okabe 1975 Printed in Japan

新 潮 文 庫

観光バスの行かない……

埋もれた古寺

岡部伊都子著



新 潮 社 版

2234

目

次

僻地 仏への道〈普賢寺と寿宝寺〉	九
播磨平野の白鳳仏〈鶴林寺〉	三
九品の極楽〈浄瑠璃寺〉	三
いのちある塔〈室生寺〉	四
明るい廃墟〈般若寺と平城宮址〉	五
戯画のふるさと〈高山寺〉	五
さくら如意輪観音〈神呪寺〉	五
黄不動の忿怒〈曼殊院〉	五
たんぽぽ菩薩〈大竜寺〉	五
笑みの木喰仏〈東光寺〉	五
黒い愛染塔〈四天王寺別院勝鬘院〉	七
浄土曼陀羅境〈当麻寺〉	七

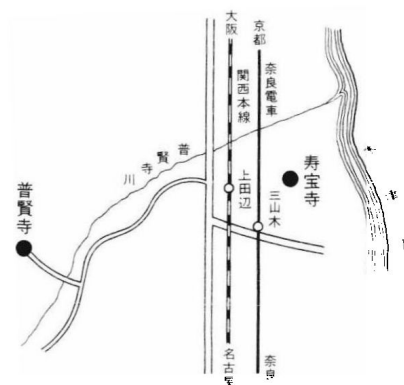
解放された禁苑〈泉涌寺〉	一五九
威神の背〈聖林寺〉	一五二
青年大日如来の目〈無動寺〉	一六三
半秘仏観音〈海住山寺〉	一七五
れいろいろの如意輪観音〈観心寺〉	一八五
紫のあやめと石仏〈白鬚の四十八体〉	一九五
水間の涙痕〈釘無堂〉	二〇五
かなしきへの字口〈蟹満寺〉	二一七
恋の火焰絵巻〈道成寺〉	二二七
ふりかえった阿弥陀如来〈永観堂〉	二四二
眉高き十一面観音〈渡岸寺〉	二五二
あとがき	二六二

観光バスに行かない……

埋もれた古寺

僻地仏への道

〈普賢寺と寿宝寺〉



いつのまにやら日本全土が観光病にとりつかれていて、そのカビのようにわきだした観光バス・ブーム。あの大きなボディの、重々しいバスを走らせるくらいなら、まずあのバスが対面してスレちがえるだけの広さと固い基礎をもつ道をつけてからにしてほしい。あんなアゼ道みたいなところを通るのは困ると絶叫しているのだが、こんな私の叫び声などいっこうなんの足しにもならない。まるで毛細血管のように細い田畑の中の道を道幅もみえないほど大きなバスが何輛も何輛もつづけて通っている。「右、三センチ、オーライ」などという車掌さんの声にリッゼンとする客はよほどの細心もの、あんな危険なのりものを、走らせる方も走らせる方、乗る方も乗る方だと、空中から見おろしては寒気だつおもいである。

観光バスが発達したおかげで、人々は歩くのをいよいよ面倒がるようになってしまった。古美術探究とか古寺巡礼とか、それも一種のブームらしいのにやはりスピード・アップの時代にマッチした観光バスで目的の寺の門前から門前へととりつけられる。観たいものを観さえすれば、それで用事は達せられるのだ。極端に言えば、べつに観なくっても、そこを訪れたという歴史をつくりさえすれば、満足なのではないか、べつに観たいと思わぬ人までがやってきているのではないか、とうたがわれるふしも多い。

東大寺や法隆寺のような大寺になると、受付あり、事務局あり、拝観券売場あり、マイクでお経を流したり、拝観順路を指示したりする見世物企業になってしまっている。まるでお役所にな

ったように尊大な権威をもつ大寺、だから、その寺の僧ときけば祇園ぎわんの信用もたいへんなもので、なまじつかな商社員では足もとにも及ばないありさまときく。なるほど、話題にするに足る仏像、印象にのこる美術品にめぐりあえるにしたところで、そのあまりにぎわめいたいらだたしい環境では真価が味わえようはずもない。もともと、仏さまとか、美しいものとかは、それに逢うためには道を遠しとせぬ気構えが必要なのだ。美に行きつくための道はそのまま求道ぐどうの本道でもあらう。

観光バスの訪れない小寺、それは、京都や奈良に近く、いや都会の中にあつたところではほとんど人の近よらない僻地へきちになつてしまつてゐる。おなじ見事な作品でも人々が逢おうとしない「僻地の仏たち」をこれから心に任せてたずねてみようというわけだ。古美術の孤島といつてはいささか感傷にすぎるけれど、どのようなところにとのようなみ仏がどんなありかたで過へぎしていらつしやるだらう……まず京都府綴喜郡田辺町つづきぐん たなべまちの普賢寺、別称観音寺を訪れようとして平坦な田舎道を歩きながら、しきりにそうした想念があふれた。

奈良電車を三山木みやまきでおりて西へまっすぐ、小高い丘や林や豊かな田畑やらを眺めてやがて清らかなせせらぎ普賢寺川に出る。そのそばに「国宝十一面観音」と彫つた石。たちどまつてみると右手にささやかな参道がついてゐる。いまは葉うつろな桜の木のトンネルだが、なかなかやさしい小道である。そのつきあたりが本堂になつてゐる。晩秋のおだやかな日ざしが木の階段いっぱいにさしてゐる。境内の小さな池には紅葉もみぢや落葉らくえつがいっぱいだ。かかりの藁家わらやが庫裡くらりらしいが、訪うのはあとにして階段に腰をかけてしばらくやすむ。いま来た道の桜並木を透かせて向う

の往来がみえる。人はいない。

おむすびや玉子巻のおべんとうを使ってみかんを食べ、まだなにかぼんやりしていると、ふいに庫裡の方から若い女の人が出てきた。お仏飯ぶつめしを持っている。拝観をたのんだらお供えをすましたあと「ちょっとうちの人をよんで来ますから」と池をこしてどこかへいつてしまった。

間もなくくわをかついだ若い男の人が迎える女の人と一緒にかえってくる。一旦庫裡へはいったがすぐ僧衣にかわってあらわれた。観音寺住職は知恩院へお勤めの由、これはご子息なのだった。

本堂へあげられるとすぐお経がはじまる。お焼香、礼拝をすませてから、正面の黒塗くろぬり厨子の戸がひらかれた。本尊の十一面観世音である。高さ一七四・二センチメートルというお姿を近くよって見あげる。こっくりといいつやのうるしが光ってなめらかな美しい肌だ。何いろだろうか、うすぐらいのではつきりはしないが黒ではなくうるみというのかセピアに近いかわった色のように見える。縦横に亀裂のはいった聖林寺しょうりんじの十一面観音にくらべて、じつに若々しい皮膚である。面ざしも気のせいかわくまろやかな気がする。身体つき、とくに背部はじつに聖林寺観音によく似ているが、よく見直すとやはりすっかりべつの感じである。近いけれど超え得ない間がある。この観音さまは修理以前は手も天衣も自分の姿をもっていたというのに、どうして聖林寺そっくりの形にかえてしまったのだろう。

「右手は小指だけが元通りであとはすっかりかえました」と箱の中にゴロゴロしている古い指をみせられた。何指になるのか手にとってみた指のかるさに、しかしこの指のままであった方がず



国宝 普賢寺観音

つとこのかたらしい風格があつたのにと思わずにはいられない。写真でみた以前の右手は腕をすつと下げたまま、自然にちよつと外へ流しているだけだ。どうもあんまり、すんなりした指とは申せないが、そのそろえた指や掌の分厚さはむっちりした体温を感じさせる。いささか鈍重な、誠実な、手の表情である。それがこのお体にはみようにふさわしい。だのに聖林寺の右手と同じように指を曲げさせたのは全体の調和をやぶる。天衣も両横にはねていたのを、聖林寺のように内に空を抱いて曲げられた。あの裳の線は、聖林寺のすらりとした背丈（二〇九センチメートル）だからこそよいのである。背丈も肉づきもちがう人間が、同じ形や服装をするバカらしさを感じる。

この観音さまは素材自体の持っている重さが、個性になって、すべてに重さがみられる。だのに手先のこなしをよその通りにやわらかにしたり、裾に新しい曲線をつくった



普賢寺川のほとりに立つ石

りしては、その重量感の調和がくずれるのだ。誰人^{たれびと}の知恵かしらないがなんでもかでもいいものを真似したらいいという、見識のなさで、みずからの個性に生きるこの観音さまにしてみれば迷惑なことだったにちがいない。

聖林寺の観音も、修理以前に比べてひどくギスギスした感じになったという人がある。

みすみすくずれゆくものは修理をしなればならないが、さて修理をすればそれだけ美しい部分を永劫^{えいごう}に失う結果になることを覚悟しなくてはならないわけだ。

この像をX線で透視したところ、胸、腹、腰、足が一本になっている木心、腕はカスガイで基本につけてあるとか、耳には銅線、天衣には銅板、目と鼻と口は極めて厚いうるしでかためられているそ

うだ。聖林寺もおなじ木彫木心乾漆像だけに内部構造もほぼ同じとみられ、天平十一面三体のうちこの二体のほか岐阜市美江寺にある作は、一七〇・九センチメートル丈の脱乾漆像という。

「お茶をどうぞ」といざなわれるまま庫裡の縁に通ると、八十あまりの老婆が吊し柿をつくっている。当主の夫人らしい人は仏像めいた丸顔で、本堂を二十八年に復元したこと、そのために山の柴を売って四苦八苦したこと、檀家を持たない寺だからお葬式はした経験がないこと、よそからのおまいりはあるが村からのおまいりなど皆目無い寺が多いが、ここでは村人たちが黙ってまゐり黙ってかえる信仰に支えられていること、もとより昔の興福寺別院だったころの歴史や、大がらのあとなどをみるとうそのように小規模だけれど、山と仏供田などでなんとか暮してゆけること、それは大事な観音さまだからもとおまいりがあればいいとも思うけれど、あまり観光的になりたくはないこと、この日に四回しかない定時バスも、殆どのり手がなくていつも運転士と車掌さんだけで走っていること、拝観者は春秋のシーズンを通して十人あるなしであることなどをニコニコしながら話される。さっきの若いお嫁さんは身ごもっていて、みんな観音さまに似たお子をと期待しているそうだ。

一年を通じての拝観者が十人内外とはあまりに少なくてみ仏にすまないようだが、安産の祈り、男の子をうみたい、女の子がほしいという母の祈り、病氣、災難よけなど、この世の苦痛を助け仏の慈悲にあわせる仲介の役をとるという心やさしい観音に対する信仰はこのしずかな部落にこそ生き生きと調和している。めったに人影をみない道を逆に、今度は駅からすこし東の寿宝寺へ寄ってみた。